



支部長・ 道場長 が語る

極真の道

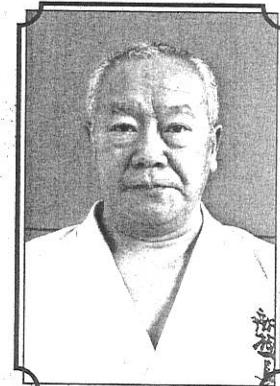
THE KYOKUSHIN WAY

第14回

『使命、伝統継承』。総裁から
教わったことを伝えるのが道。

日々、進化を続けるフルコンタクト空手。その中でも忘れてはいけないものがある。各支部長・道場長のヒストリーを紹介し、極真の精神や入門当初の貴重な秘話などを語っていただく当連載。第14回は世界大会日本代表監督に従事し、選手強化副委員長としてユース・ジャパンも牽引する奥村幸一支部長にご登場いただいた。

Interview／松浦俊秀 Photo／神田勲 写真提供／奥村幸一支部長



奥村幸一 支部長

千葉南支部

——奥村支部長が空手に興味を持たれたのは、いつでしょうか。

「入りは空手ではなく竹脇無我さんが演じられた『姿三四郎』です。小

学生の時に見て、柔道と言うよりも白い道着と黒い帯、そして下駄に憧れました。その後も桜木健一さんの

『柔道一直線』、中学生になつたからに『空手バカ一代』を読んで完全に虜になりました。そこからはお金

を貯めて大山倍達総裁のレコードや本を買いあさつたり、高校の時は総裁や有名な師範方に、必ず年賀状や暑中見舞いを送っていました

——ご出身は福岡県ですよね。

「高校を卒業するまで福岡です。まわりは山とか田んぼだらけ。家から10分くらいのところに神主さんがいる無人の神社があつて、そこにサンドバッグを吊るして空手の真似事をしていました。『ここはケンカの神様を祀る闘魂神社ぢや』と弟の啓治が言つっていたのを覚えていました」

——道場に通うのはだいぶ先ですか。
「そうですね。一番の転換期は高校3年の時に税務署の公務員試験に合格して、熊本の税務大学校に通うようになつた時です。全寮制の学校で、給料をもらいながら1年ほど研修に従事しました。初めての給料で、寮生の大きなポスターを買って寮の2人部屋に貼つていたので、まわりの寮生はみんなびっくりしていたと思います。色は褪せましたが、そのポスターは今も道場に貼っています」

——千葉での配属後、すぐに入門されたのでしょうか。

「卒業直後の6月までは船橋市で短期研修でした。ですので、入門は7月の千葉配属に合わせてですね。忘れられない7月4日です。仕事帰りに当時の極真会館千葉南支部の小嶋道場で入門の手続きをして、その日は道着だけ買って帰りました。憧れの道着でしたから、その夜は道着を着て寝たのを覚えています」

——入門当初のこととも鮮明に覚えていらっしゃいますか。

80

で道場の白石昌幸先輩が中村誠師範と延長までもつれ込む死闘を演じて4位に入賞。初めて生で先輩の姿を見て感動し、自分も絶対に全日本大会に出場すると思ったのを覚えています。今思うと青春のすべてを懸けてしまします。結果はどうであれ、やらないともつたないですよ」

——奥村支部長が初めて試合に出場されたのは、いつでしょうか。

「入門翌年の4月に道場内の支部大会に出場しました。「優勝すれば全日本大会に出場できた」と後から聞いたのですが、二回戦で負けてしましました。ちょうどその頃に毎週曜日に行なわれる全日本大会を目指してしたけど師範に許可をもらつて参加させてもらいました。千葉本部の人でもあまり参加したがらないような選手クラスに出席するようになつたのが、選手としての最初の転換期ですね」

——心に火が点いたわけですね。

「当時は支部から2人しか全日本大会に出場できませんでした。そんな中、千葉の支部大会で準優勝して、初めて全日本大会の出場権をつかみました。1983年の第15回大会で結果はベスト16。第3回世界大会の選抜戦でしたが、四回戦で水口敏夫

師範に敗れてしまいました。ただ、日本代表まであと一歩だったことも

あり、そこで大山総裁に名前を憶えてもらつたんです。師範に「惜しかったと総裁も褒めていたぞ」と言わ

れて、天にも昇るような気持ちでした。そして翌年の世界大会で水口師範に「奥村さん、感動した? 次は奥村さんたちの番だから」と言わ

て、そこで完全に火が点きました」

——そこからの4年間は、まさに死に物狂いだったそうですね。

「それで第4回世界大会の選抜戦となつた第18回全日本大会で初めて入賞（6位）することができました。

ただベスト8ということで日本代表に選ばれたのですが、その後、白紙に戻されてしまったんです」

——急きよ総裁が2次選抜を設定されましたと聞いています。

「全日本大会の後に総裁がヨーロッパなど海外の大会を視察されて、危機感を持たれたのだと思います。心底落ち込みましたが、翌年の全日本ウエイト制大会重量級で4位に入つて、そこで正式に代表の座をつかみました。現在は2次選抜が当たり前ですが、あれは僕らの時にできませんでした」

落選は許されなかつたでしようね。」

——代理権をつかんでいただけに、のなんですか」

「もう意地ですね。ただ代理権をつかんだおかげで人生が変わりました。支部になれたのも世界大会に

出場したからですし、出場していな

かつたら税務署も辞めていなかつた

と思ひます」

——選手としては第4回世界大会で一区切りでしようか。

「25歳まで燃えていたので、世界大会以降は燃え尽き症候群のようなところがありました。恰好をつけて引

退なんて言つていましたけど、火が点かなかつたというのが本当のこところがありました。恰好をつけて引

ろだつたかもしれません」

——奥村支部長でも、そういう時

期があつたのですね。

「でも僕は頂点の景色を見ていないですし、選手時代にやり残したこと

があるからこそ負けた選手の気持ちがわかるんです。中途半端な形で選手を辞めてしまったので、やはり後悔がありました。でも、その思いが

あるからこそ選手に声をかけたりで

起きると思っていますし、命を懸けている思いでやっています」

——熱い言葉の数々は、そういう

思いがあるからこそなんですね。支

部長が空手一本に絞られたのは、お

いくつの時でしょうか。

「40歳になる時に四段を受審してい

ますので39歳ですね。公務員という

ことで副業は禁止ですから、現在の

本部道場を構える際に税務署を退職

しました。ただ借金もありましたし、

子どもも小さかったので最初は家内に反対されました。でも、1週間経つたくらいに『あなたの好きなようにやりなさい』と言つてくれたのを

覚えています

——人生を懸けた大勝負ですよね。

「この道より我を生かす道なし、この道を歩く。これは実家に飾つてあつた武者小路実篤の言葉です。親父が買つてきた額縁に入つてた言葉で、それを小さい時から見ています。空手を始めてしばらく経つた頃に、自分の道は空手だと強烈に思つたことがあるんです。親父が導いてくれたと思って、その時に空手の道でいこうと決心しました」

——そんな奥村支部長が考える極真の道とは何でしようか。

「伝統繼承ですよね。僕もまだ修行の身ですが空手の強さ、素晴らしい

を後世に伝えることです。あと弟の啓治が昔は修羅の道に行くのではな

いかという感じでしたが、緑健児代表と出会いことで人生が一変しました。

福岡の師範代や中国の支部長に任命してくださつたことで、まつと

うな道を歩むことができたんです。

弟がよく『使命、出会いは奇跡を起

こす』というフレーズを使いますが、それは緑代表のことなんです。な

で僕は支部のキャッチフレーズを

『使命、伝統繼承』に変更しようと

思っています。開設以来『千葉から世界へ翔たけ!!』というフレーズを

掲げてきましたが、20年越しで変更します。この言葉を胸に、僕なりに

総裁から教わつたもの、そして新極

真会の素晴らしいを最高の仲間とともに継承していきたいですね」



1 18歳の時のワシントン道場の下だけ購入し双子の弟である登志郎には見ゆる稽古をしていました。2 自室には登志郎が持つてた開拓魂「直進」という文字が壁に貼つていた。3 小嶋道場の前で入門直後にはサンガラスと田のエナメルの靴を履いて油袋の総本部道場を訪れたがその場の雰囲気に圧倒されてしまふ不動になつたらしい。

4 第4回世界大会は日本武道館で開催された